古今和歌集注釈書における竹取説話

"The tale of the Bamboo Cutter";
Considered from commentaries on The Kokin Wakashu

飯田　さやか
Sayaka Iida

大妻女子大学大学院　人間文化研究科　言語文化学専攻　博士後期課程

キーワード：竹取物語，竹取説話，古今和歌集注釈書
Key words：Taketori Monogatari, The tale of the Bamboo Cutter, Commentaries on The Kokin Wakashu

１．研究目的

『竹取物語』はその成立以降，様々な文学作品に引用・受容されてきた．しかし，平安末以降，それまでの『竹取物語』とは少し違った形の『竹取物語』が現れる．それらは竹取説話と称され，『海道記』を初めとして古今和歌集注釈書類や歌学書，説話集や寺社縁起類に散見され，現時点では三十五の作品に竹取説話の収録が確認されている．これら竹取説話は，⑴古今集注，⑵寺社縁起関係，⑶『源氏物語』注釈書に現れる紹介記事の三つに大別される（奥津春雄「三つの難題と鶯姫と―竹取説話考序説―」,『徳島文理大学文学論叢』創刊号　1984．3）．竹取説話については主に奥津春雄氏が詳細に論じており，竹林の鶯の卵から出生することおよび金色の語に関しては,「竹幹の中から美女が生まれても，鶯の卵からかえっても，超自然的なことには変りはない.」（前掲奥津論文）と論じている．鏡を形見に残すことに関しても,「面影をとどめた鏡を贈ることの方が情趣深く物語的な雰囲気があると考えられたであろう」（奥津春雄「室町末期の竹取説話―付，形見の鏡の成立―」,『徳島文理大学文学論叢』第２号　1985．3）と論じている．しかし，何れも詳細な検討にはいたっておらず，再考の余地があると考えられる．また，多くの先行研究では，竹取説話のいくつかの作品に焦点を当て，部分的に扱っていくという手法を取っており，竹取説話全体を検討したものは少ない．その大半が「鶯の卵からの出生」といった一つの要素や，古今集注釈書などの紹介された文献のジャンルに依る分類に基づいて，現時点で確認できている三十五例のうち，二十例前後の竹取説話の検討を行っている．こうした状況を鑑みたとき，既存の分類をそのまま当てはめて検討を進めることは難しいといえよう．

本研究では，竹取説話に特徴的な要素の背景を明らかにすることを目的とする上で，竹取説話全体を一定の話型のもとに系統化することを試みた．

２．研究実施内容

2-1．先行研究の竹取説話分類

竹取説話全体を検討，分類した先行研究としては，①三谷栄一[1]氏，②田口守[2]氏，③奥津春雄[3]氏の三氏のものがある．（図 1）

作品名	①三谷	②田口	③奥津
『今昔物語集』	○		○
『海道記』	○	○	○
『古今集注義･信』	○	○	○
『古今為家抄』			○
『古今和歌集序聞書三流抄』		○	○
『頓阿序注』		○	○
『毘沙門堂本古今集注』		○	○
『了誉序注』		○	○
『曽我物語』	○	○	○
『神道集』			○
『詞林采葉抄』	○	○	○
『三国伝記』	○	○	○
『桂川地蔵記』	○	○	○
『和歌百首註』	○	○	○
『源氏物語提要』			○
『臥雲日件録抜尤』	○	○	○
『芝草句内岩橋』		○	
『聖徳太子伝拾遺抄』		○	
『花鳥余情』			○
『塵荊抄』			○
『法華経鷲林拾葉鈔』			○
『富士山（謡曲）』	○	○	○
『本朝神社考』	○	○	○
『国名風土記』	○		○
『富士山の本地』	○	○	○

図 1．先行研究における竹取説話分類

①三谷氏は十三の文献を対象とし，竹取翁譚の要点は出生方法と結婚の有無，結末の三点であるとした上で，出生方法のうち，鶯系は口誦伝承であろうと推定した．②田口氏は十七の文献を対象とし，中世竹取翁伝説は，「竹姫型」，「鶯姫型 A 類Ⅰ型」，「鶯姫型 A 類Ⅱ型」，「鶯姫型 B」に分類可能であるとした．③奥津氏は二十三の文献を対象として竹取説話が記載された文献のジャンルによる分類を試み，ⅰ中世古今注系統，ⅱ寺社縁起関係系統，ⅲ『源氏物語』注釈書類系統の 3 系統に分類したが，何れの竹取説話も古今集注釈書類竹取説話の系統であるという解釈に集約されているようである．

２‐２．要素とストーリーによる再分類

現在確認できている三十五例の竹取説話を先行の奥津氏のように記載されている文献のジャンルによって細かく分類してみると，『今昔物語集』や『塵荊抄』など何れにも分類できないものが出てくる．そこで，説話中に登場する要素とストーリーに依って分類することを試みた．こうした分類方法は所謂「昔話」の分野において古くより試みられ，日本では柳田国男氏の『日本昔話名彙』[4]二始まり，近年では稲田浩二氏『日本昔話通観』[5]などがその代表的なものである．母体数の多い昔話の分類をわずか三十五例の竹取説話にそのまま当てはめることは不可能であるが，分類基準にストーリーを追加することで，より詳細な分類が可能となることが期待される．

竹取説話の要素のうち，『竹取物語』と対照的に比較出来得る要素として，㊀出生方法，㊁結婚の有無，㊂形見の品，㊃別れ，㊄富士の煙の由来の五つを設定した．その上で，各竹取説話を分類すると，以下 A〜D の四系統のストーリーに大別される．

A㊀出生（竹）→㊁結婚なし→㊂形見の品→㊃別れ→㊄由来

B㊀出生（竹）→㊁結婚→㊂形見の品→㊃別れ→㊄由来

C㊀出生（卵）→㊁結婚なし→㊂形見の品→㊃別れ→㊄由来

D㊀出生（卵）→㊁結婚→㊂形見の品→㊃別れ→㊄由来

すべて説話の展開を登場する時系列に沿って分類した．

まず，A〜D は竹生の A，B および卵生の C，D に大別される．それぞれの系統には特徴を見出すことが可能である．例えば，A「竹生」かつ「結婚なし」の場合は浅間明神の話として語られる傾向にある．また，B にのみ形見の品として返魂香が残される．C は結婚拒否という要素が共通し，D は竹取説話の中核をなす古今和歌集注釈書の系統に属する．この系統は文献数が非常に多いため，分類レベルを追加することでより詳細に分類できる可能性がある．

３．まとめと今後の課題

本年度は，要素とストーリーによる竹取説話の分類を試みた．出生方法，結婚の有無によるストーリーを軸に，要素によって詳細に分類することで，大きく四つの系統を示すことが出来た．この検討により，同じジャンルの文献に記された竹取説話であっても詳細に分類していくと別の系統である場合があることも明らかとなった．今後，竹取説話を記載していると認められる文献が発見された際も，この要素による分類を参考にしながら，竹取説話間の関係を考察するための一助とすることが出来ると考える．

今回の分類の問題点としては，文献によっては記述されない箇所をどう扱うかという点である．そうした場合，実際の本文を検討しながら文脈で判断していくということが不可欠であり，分類はあくまで指標である点が留意される．

今後は，現在未確認の富士縁起系統の竹取説話も併せて検討し，要素による分類の一層の充実を図り，竹取説話の系統を明確にしていきたい．

[1]三谷栄一「竹取翁物語の発展」（三谷栄一『新訂版　物語文学史論』有精堂,1965 所収）
[2]田口守「竹取物語と中世竹取翁伝説―姫の結婚と結婚拒否の間」（『中古文学』23,1979.4）
[3]奥津春雄「中世竹取説話」（奥津春雄『竹取物語達成と変容』翰林書房,2000 所収）
[4]柳田国男『日本昔話名彙』日本放送出版協会,1971
[5]同朋舎より 1977 から 1998 年にかけて出版.全 29 巻.